

戦姫絶唱シンフォギア ～魔進～

しろ飯

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シンフォギアの世界にチエイスがやって来た。人間を守るためチエイスは未知の存在ノイズに挑む！ 戦いを続ける中、チエイスは何を思うのか？

以前からSSを書いてみたいと思っていた、今回投稿させて頂きました。生暖かい目で見て頂けると嬉しいです。

3月29日に誤字の修正を行いました。報告ありがとうございます。

目次

魔進登場	1
再び訪れる災害	10
葵い少女	17
屈辱	26
追跡	32
ノイズの死神	39
始動	48
望まない再会	63
困惑	74
誤り	86

魔進登場

そこには何も無かった。光が一切無い暗闇のなかにチエイヌはいた。まるで沼の底に沈んでいくような不気味な感覚を感じた。

体が動かない。身体に力が入らず、手足がピクリとも動こうとしなかった。まるで、手足が無いようだ。

人間だったらこんな局面のときどうするのか。足掻くのか？ それとも身を委ねるのか？ 分からなかった。

俺はこのまま沈んでしまうのだろうか？

そんな時、

「……………これは？」

声が聞こえてきた。話し言葉とは違う一定の規則性がある声。聞いたことがある。これは、たしか歌と言ったか。

よく、街中や建物の中で聞いたことがあった。だが、その時とは何かが違う。儂いが、力強い響き。そんな歌を聞いていたら不思議なことが起こった。何故だろうか……………こんなことは今まで経験したことがなかった。

何故、胸の中心が温かく感じるのか。

いつしか沈む感覚は無くなり、暗闇だった周りは光りを取り戻してだんだんと色を取り戻して行った。

少し時間が経つとその歌は聞こえなくなった。時間にして約十数秒。

歌が聞こえなくなると、暗闇が色を取り戻した頃、気づけば彼は破壊された建造物の中にいた。

「……………(トク)はっ？」

見覚えの無い場所。周りを見渡すと千を超える観客席が囲うように設置させている。上を見上げれば天井が無く、朱に染まった夕焼けの空がみえた。どうやらスタジアムにいるようだ。

「俺は、今まで……なにを？」

今までのことを思い出せない。まるで抜き取られたかの様に記憶のデータの大部分が消失していた。大切なもの。忘れられないものがあつた筈なのにそれら全てが思い出せない。

今のチェイスには何も無かった。

「これから、俺は——」

不意に、後ろでコンクリートの崩れる音が聞こえた。崩壊したスタジアムの一部が崩れ落ちたのだ。

その音にとっさに振り返る。

「あれは!?!」

すると振り向いた方向に少女が倒れていた。そこは崩れ落ちたコンクリートの進行方向。このまま進めば少女の命は無い。

人間を守れ

迷わずチェイスは駆けた。身体に組み込まれたプログラムが彼を突き動かす。

だが、このままでは間に合わない。チェイスと少女との距離が遠すぎる。彼の身体は機械であるため身体能力は人間を上回っているが、それでも崩れ行くコンクリートの方が上だった。しかし。

「このままでは……だが！」

チエイスは機械の体を持ったロイミュード。彼に備わっている機能は人間以上の身体能力だけではない。

チエイスから波動が発せられる。次の瞬間、崩れ行くコンクリートの流れが突然鈍り不自然なほどゆっくりになった。

名を「重加速」ロイミュードに備えられている身体の動きを困難にさせる能力。一部の例外を除き、あらゆる物体にそれは影響を及ぼす。

滑り混むようにコンクリートと少女の間に入りこみチエイスは少女を抱き抱えてその場を離れる。それと同時に重加速が終わり、ゆっくりと動いていたコンクリートがその勢いを取り戻して少女がいた場所を飲み込んでいった。

「……何故、重加速が？」

後ろを振り返り、チエイスは崩れ落ちたコンクリートを見る。

ロイミュードによって起こされた重加速はその発動させたロイミュードの任意で終了させることができる。だが、今チエイスが起こした重加速は勝手に終了した。これは本来あり得ないことだ。

だが、今はそれどころではない。

「まだ、息はあるな」

最優先するべきは今も意識のない少女の命である。

チエイスは周囲を見渡し脱出経路を探す。幸いにも一つだけ崩壊を逃れた出入口を発見した。いつまでもこんなところにいる訳にはいかない。

少女を抱き抱えて動こうとした、その時だった。

「っ!？」

後から異様なものを感じ取り、咄嗟に少女を背にして振り返る。異様なものを感じた方向には何もいなかった。しかしその直後、壁や床からまるで植物のように異形がその姿を現した。

「コイツらは……」

その異形は、チェイス達を囲うように六体ほど現れ彼らへと迫ってくる。その途中、異形の内数体が進行方向にあったコンクリートの残骸を通り抜けるようにすり抜けた。

奴らは危険だと、チェイスの直感がそう危険信号を発した。

「……囲まれてしまったか」

異形は飛びかかったりこそしてこないものの、彼らとの距離をジリジリと詰めてきている。

コンクリートの残骸をすり抜けたところを見る限り物理的な手段はまず無意味だろう。

「(また重加速を、いやダメだ)」

その手段が頭の中を過ぎるが、即却下する。先ほどのように勝手に終了されでもしたらかえって危険である。

今のチェイスには策が無かった。しかし猶予は無い。危険を承知のうえで重加速を再び使うか。

手段を模索していると異形の更に後方から三つの小さな銀色の物体が走ってきた。そのうち一つの上には小さな物体を大きく上回った物が載っていた。

「あれはー！」

後から現れたそれらはチエイスのよく知る物だった。小さな銀色の物体の正体は「バイラルコア」チエイスの相棒の一つである。

三つのバイラルコアは異形の間を潜り抜け、チエイスへ向けて上に載っていた物を投げた。

「お前達」

バイラルコアから投げ出されたそれをチエイスは迷わず受け取る。その正体は彼の二つ目の相棒、「ブレイクガンナー」チエイスが更なるパワーアップをするために必要な拳銃型ガジェットである。

「これなら戦えるというのか?」

チエイスの問いに三つのバイラルコア達は中のエンジンを吹かすことで肯定する。脳波を通してバイラルコアから伝えられる。この力なら戦えると。この力なら人間を守れると。

「そうか……」

短くそう言うと、チエイスはブレイクガンナーを握りしめた。今も止まらず近づいてくる異形を睨む。

「貴様らが何なのかは知らん。だが、この女に、人間に危害を加えるのら俺は容赦しない……!」

ブレイクガンナーの銃口を手の平にあて、その中にあるスイッチを押し込んだ。

「break・up」

瞬間、チエイスの身体に紫電まわりつき周りに金属のパーツが出

現。それらが彼の全身に装備される。

バラバラになったバイクのパーツをくつつけたような紫を基調としたカラーリング。オレンジ色の複眼。右目は完全にではないがパーツで隠れている。

その名は「魔進チエイサー」ブレイクガンナーを使うことでなれるチエイスのもう一つの姿である。

「gun」

ブレイクガンナーの銃口をもう一度手の平に押し込み、ガンモードにする。

そして、目の前にいた異形の一体へ向けてトリガーを引いた。

紫の光弾が放たれ、異形を貫く。

「なんだと?」

光弾に穴を開けられた異形の体が、みるみる色を失って灰のようになり崩れ落ちた。

「生物ではないのか……」

灰になってそこに落ちた異形の成れ果てを見る。灰になる前の面影はそこには無い。

他の異形も同族が倒されたのに一切の反応がない。どうやら、生物としての肉体、生物的感情はこの異形等には無いらしい。

「だが、それはどうでもいいことだ」

そう、チエイスにとって重要なのはそこではない。相手が生物であろうとなかろうと、どんな姿であっても関係ない。

なりふり構わずチエイサーは光弾をばら撒き、他の異形を灰にし

た。

「人間に仇なす存在は全て排除する。それが俺の使命だ」

風が吹いて異形だった灰が空へ舞ってなくなる。それを一瞥すると、チエイサーは少女の方を振り返った。近付いて、下から少女を見下ろす。大丈夫だ。まだ、生きている。

「また、突然現れるかもしれん……」

あの異形が現れたことを振り返っておそらく地形を選ばず出現するだろう。今いた分は倒したが、いつまたどこから出てくるか分からない。その為、最初に見つけた出入口を利用するのは危険である。狭い場所で囲まれる事態は回避するべきだ。

「……来い」

空いている片手の手を開く。すると、三つのバイラルコアのうちの一つが手の中に入ってきた。コウモリのような羽の形が彫られたバイラルコアだ。

それを確認して、チエイサーはバイラルコアへそれをセットする。

[Tune・chaser — bat]

機械的なボイスがブレイクガンナーから流れて、チエイサーの背中からコウモリの羽に似た機械の翼が現れた。

「遅くなってしまったな。暫くの間、我慢してくれ」

今も意識のない少女をそっと抱き抱えると背中中の翼を広げて飛び立つ。

足場の無いところなら異形は出てこない。そう判断しての行動だった。

屋根の無いスタジアムの上を行って、夕焼けの空へ到達する。

「死ぬな、生きろ」

下を見れば多くのビルが立ち並ぶ大都会の上。傷付いた少女を抱き抱え、機械の戦士が羽ばたいて行った。

◆ 「ネフシユタンの鎧 起動実験」報告

ツヴァイウイングのライブ形式を模し、地下に増設された実験施設にて実験を開始。装者、奏と翼の働きにより起動成功を収める。しかし、エネルギーを制御できず暴走。それと同時にノイズが発生。その事故によりネフシユタンの鎧は現在、行方不明。

ガングニール装者、天羽奏の死亡を確認。

「絶唱」の使用に加え、起動実験のためにLINKER投与を控えていたことと適合係数の低さが重なっていたことが原因として上げられる。

これらに加え、ネフシユタンの鎧暴走、ノイズの発生事故以外での異常をカメラ映像で確認。

ガングニール装者、天羽奏の死亡直後、破壊を逃れた全てのカメラの機能が謎の停止。数秒後に回復。そこに撮られていた映像に男の姿を確認。のちに再び発生したノイズに対し、姿を変え応戦。掃討した後、上空へ飛翔し姿を消す。

映像解析したデータを元に身元を探すが身元不明。現在、この正体不明の男性を捜索中。

以上

再び訪れる災害

あの日、ツヴァイウィングのコンサートに行った日。友達と一緒に行くはずだったけど事情で来れなくなって、しかたなく私一人で行くことになった。初めてのコンサートだったけど、翼さんと奏さんの歌は素敵で、胸がドキドキして目を話せなかった。

けど、それはあつという間に終わってしまった。

突然ホールの床が爆発して、誰かがノイズが出たと悲鳴を上げた。みんなパニックになって逃げた。ノイズは空から、地面からやってきて沢山の人を灰にしてしまった。

何が起きたのか、その時の私は分からなかった。

気がついた時には、翼さんと奏さんが不思議な姿になってノイズと戦っていた。二人はその時も歌っていた。逃げなきや行けないのに二人のことを見入ってしまった。

それがいけなかつたんだと思う。突然足もとが崩れ落ちて、足を痛めてしまった。逃げろと叫ばれて、ここから離れなきやと思つて頑張ったけど、ダメだった。

何が体に当たって、赤いものと一緒に舞って、何も分からなくなつた。死んじやうのかなつて。

「生きるのを諦めるな！」

奏さんの声が聞こえてきて、そこからは覚えていない。

目が覚めたら時、知らない天井を最初に見た。病院にいるって気づくまでけっこうかかった。

私は生きていた。

あれから二年がたって、私立リディアン音楽院に未来と一緒に進学。今日はその入学式。

「そういえば、あの日夢見たっけ？」

ふと、思い出した。

「えーっと、たしか夕焼けで……」

眉間にシワを寄せて、腕を組んで思い出す。うーん、と悩む声は口からもれる。

「あ、そう！ 夕焼けの空！」

だんだんと思い出してきた。確か下に街があって、その上の空に自分が浮かんでいた。

「それでー、えっと……声が聞こえてきて、あれ？ 聞こえたっけ？」

分からなくなってきた。そもそも話、そんな二年も前の夢なんて思い出せる訳が無い。そんな昔見た夢を覚えられるなら、今彼女は成績なんてものに頭を悩ましていない。

渋い顔を作って、うーんと唸る。

「ビビキー！ 早くいくよー、時間見てるー？」

「うん？」

声が聞こえて、我に返る。外から聞こえた。未来の声だ。時間と聞こえたので、壁にある時計に目をやった。

「時間……？ あっ!？」

時計の針は八時を回っていた。昔見た夢なんかは時間を割いている場合じゃなかった。

「いつけない！」

足元に置いてあったカバンを持って玄関へ駆け出す。途中、足元が滑って転びそうになった。

「さすがに初日の入学式に遅刻はまずいつてえ!？」

朝日の差すとあるマンションで立花 響の叫び声が木霊した。



背の高い建物が立ち並ぶ大都会。そびえ立つビルの中でも周りと比較、それなりの高さをもったビルの屋上にチエイイスはいた。

上から見おろして街中を歩く人間達を見ていた。強いビル風がチエイイスを襲うが、彼はびくともしない。

「あれから二年か」

チエイイスのいる場所。そこからコンサートホール が見えた。気がついた時、彼はあそこにいた。異形を初めて見て、少女を救ったあの日からもう二年の時が過ぎた。破壊されていたコンサートホールは修復され、度々開かれるイベントでたくさんの人を集めていた。

「時間の流れと言うのは不思議だな」

あの日起こった事件で多くの人間の命が失われ、多くの人間達は悲しみに打ちひしがれていた。当然今もそれは続いているが、当初と比較してだいぶ少なくなっていた。

「ノイズ、奴らは何故人間を襲う？」

あの日から今日に至るまで、チエイスはできる限り多くの情報を集めた。自分のこと以外何も知らない彼にはありとあらゆる情報が必要だった。今でもそれは続けている。

集めている情報の中でも重要視しているのは異形の事。その正体はノイズ、人類の脅威とされている特異災害というらしい。場所を選ばず出現し、人間のみを襲う害悪な存在。有効な対抗手段は無いらしく、自然消滅するまで耐えるしかない。

(足りない。もつと多くの情報が必要か……)

二年前にノイズと対峙して以降、奴らと出会ったことがなかった。ノイズが発生すれば避難警報が流れるのだが、それさえ流れていない。警報がなる前に発見出来ればと、三つのバイラルコアの内二つを捜索に使っているが成果は上げられていない。数が少な過ぎる。

「ノイズが現れないに越したことはないのだが」

ノイズが二年の間、発生していない。それ自体は良いことなのだが、そこにチエイスは違和感を抱いていた。

「考えすぎだろうか」

ノイズは特異災害。事前に発生を予想することはできない。だが、規模や形に違いはあれど、あり方は地震や台風と同じだ。それが二年もの間、本当に一度も起きていないのだろうか。

「キリがないな」

憶測では話にならない。確かな確信とそれを証明する事実が欠けている。何か有力な手掛かりのようなものがあれば少しは変わるの

だが。

「手掛かり、か」

視点を遠くの方へ向ける。そこには海があつて、近くにはあのコンサートホールもあつた。



海に日が沈み初め、夕暮れ時になる。夕日に照らされてコンサートホールが朱色に染まる。一度開かれれば沢山の人を呼び込み喜びの歓声に溢れるその場所も、人が訪れなければただの物静かな無人の建物に変わる。

「こうやって踏み入るのはこれが初めてだな」

そこに一つの人影があつた。チェイスだ。

あの日以降、彼がここに訪れたことは一度もなかった。コンサートが行われているのを遠くから見たことはあつたが、こうして間近で見るのは初めてだった。

「二年前、ここがあんなことになっていたとは思えんな」

破壊されていた面影はそこには無く、あるのは綺麗に整備されたコンサートホールだった。本当にあの時の姿は見る影も無い。

「ここならと思つたのだが……」

彼の目的は有力になる情報の収集。ここへ足を運んだのもそれが理由だった。しかし、修復され元の状態に戻つたこのコンサートホールには二年前に起きたノイズ発生事故の痕跡すら見られなかった。

「これ以上は無駄か」

何も得られない場所に留まる必要は無い。引き返そうとした時だった。

「――誰だ？」

誰かに見られている感覚。

振り返り、ブレイクガンナーをガンモードにして構える。が、そこには何も無かった。

「……………」

ブレイクガンナーを構えた姿勢のまま、暫く周りを索敵するが何も起きなかった。警戒は解かないまま、ブレイクガンナーを下げる。

(確かに俺は今何者かに見られていた……………)

確かに何者かがそこにいた。確信があった。気のせいなんてことはチエイイスに限って有り得ない。しかし。

(……………だが、なんだ？ 何が違う)

それはチエイイスの知るものとは何かが違う。人のものとは違う何が別の類いのもの。例えるなら、カメラに視られているような。だが、本当にカメラならこんなことにはならない。

得体の知れない存在に警戒を配っている時だった。そこへ一つのバイラルコアがチエイイスの元へ飛んできた。まるでキヤッチボールの感覚でそれをキヤッチする。

「まさか」

遅れてバイラルコアから送られた情報が届くのと、街中に避難警報が流れたのは同じタイミングだった。

「ノイズか……！」

二年振りにノイズが現れたことを知るとブレイクガンナーを握る手に力を込めた。



チエイスとバイラルコアがやり取りをしている最中を離れた場所から除く影があった。

『……』

その影は、チエイスが魔進チエイサーとなり空へ消えて行くのを確認すると静かにその場から消えていった。

葵い少女

日が沈み夜になった空を魔進チエイサーとなったチエイスが飛んでいた。金属で出来た翼をはためかせ、ノイズの元へと急ぐ。

遠くの山中で爆発音が鳴り、炎と煙が舞い上がった。

「自衛隊か！」

ノイズが発生した場合、自衛隊（特異対策起動部）が出撃しその進行を防ぐまたは遅らせるために交戦する。だが、有効な対抗策が無いため付け焼刃に過ぎない。

「あと少し、耐えてくれ」

翼を大きくはためかせて、現場への到着を更に急いだ。



山中にある村の中で、ノイズと自衛隊が交戦を繰り広げていた。しかしそれは一方的なもので、自衛隊が扱う銃火器による攻撃はほぼ無力なものだった。銃の弾丸、ミサイルはノイズの体をすり抜けてその後ろで爆発を起こす。

「ク、来るなああああ!？」

前衛の兵士が悲鳴を上げて灰になった。それに続いて、二人、三人とノイズの接触を許し灰になっていく。

「後退！」

絶えず攻撃を続ける中で1人の男が指揮を執る。無線を利用して全体へ指示を出す。彼等の目的は時間稼ぎだった。仲間が減ってしまえがそれが厳しくなる。

「クソッ！」

銃を連射する。今、自分らに出来ることはこれしかなかった。だが、残りの残弾も乏しかった。

弾が切れて弾倉を交換しようとした時、足元から何か生えてきた。ノイズだった。

「あ……」

声なんて出なかった。走馬灯なんてものも出ない。ただ死ぬとだけその時分かった。

ノイズが男に触れようとした時、紫の閃光がノイズを貫いた。

「へ……っ？」

風穴を開けられたノイズは灰になり始めていた。何が起きたのかわからないまま、上を見上げた。

上空から何かが降ってきて、着地と共に灰になりかけていたノイズを踏み潰した。

『間に合わなかったか』

それは人型だった。何かを1人で呟いて、こちらを見てきた。声が出ず、ただ目の前の人型を恐ろしいと直感的に思った。

『ここから去れ。邪魔だ』

それだけを言うと人型は背を向けて、ノイズの方へ向かっていった。



チエイサーの前に広がるノイズの大軍は二年前に初めて会った時よりも遥かに多かった。100はいるだろうノイズは今も進行を続けている。

山状に盛られた灰がいくつもあつた。その正体は言うまでもなく、ノイズの害悪性が改めて再確認された。

「許さん」

[gun]

ブレイクガンナーをガンモードにして光弾を連射する。風穴を開けられたノイズが次々と灰になって崩れ落ちる。だが、数が多いためそれだけでは早期に決着が付きそうにない。

「来い！」

左手をかざすとその手の中に一つのバイラルコアが飛び込んでくる。蛇の形が彫られたバイラルコアだ。

チエイサーはそれをブレイクガンナーにセットする。

[Tune・chaser—cobra]

チエイサーの背中から機械の翼が現れ、紫の光を帯びながら腕の方へ移動してブレイクガンナーと合体する。すると先端部分から蛇の形を模した鞭が伸びてきた。

武装チエイサーコブラ。装備、テイルウィッパー。

「フンッ！」

テイルウイツパーを薙ぎ払う。その勢いでテイルウイツパーの鞭の部分が更に伸び、沢山のノイズを巻き込む。巻き込まれたノイズは横に引き裂かれ、半身が宙を舞いながら散っていった。

「ここから先へ行けると思うな」

テイルウイツパーを引き戻して、ブレイクガンナーの銃口を手に押し当てた。

「execution・full break——cobra」

ブレイクガンナーと一体になっていたテイルウイツパーが分離。チエイサーの頭上を円を描くように浮遊し始める。

「——やれ」

チエイサーが命令すると、浮遊していたテイルウイツパーがノイズへ襲いかかる。全身を鞭として暴れ、喰らいつき、蹴散らして、薙ぎ払う。野性の獣さながらの獰猛な動き。これが、武装チエイサーコブラのなせる技である。

「gun」

追撃をするようにガンモードにしたブレイクガンナーでノイズを攻撃する。

機械の蛇に引き裂かれ、紫の光弾に撃ち抜かれ、ノイズの大軍は蹂躪されたか如く打ちのめされた。

「終いだ」

最後の一体をブレイクガンナーで撃ち抜き、発生したノイズ全てを灰にした。

役目を終えたテイルウィッパーはチェイサーの元へ戻り、淡い光と共に背中へ収納された。

後ろを振り向く。

「何故、逃げなかった？ 邪魔だと言った筈だ」

チェイサーの見る先にはまだ自衛隊が残っていた。その誰もが手にある武器を下ろし、視線を彼へと向けていた。自分らが戦っていたノイズが倒されたのに誰一人として口を開かなかった。

彼らの目には共通するある感情が宿っていた。その正体はチェイサーも知っているもの。

「恐怖か……」

目の前にいる存在、チェイサーに対し皆恐怖を抱いていた。突然空から降ってきて、誰も想像しない力でノイズを殲滅した。そんな正体不明な人型を前にして、歓喜の声を上げられる方がどうかしている。

「……お前達の攻撃で火災が発生している。早く消化を——」

チェイサーの上から大きな影が指した。振り返ると、10mを超える巨大なノイズが彼らを見下ろしていた。

「何ッ!？」

それだけでは無い。倒したのと同サイズのノイズも先ほどよりも少ないが再び発生している。

そのノイズが形状を変化。自らを弾丸のようにしてチエイサーを襲う。今まで見たことのない、ノイズによる攻撃だった。

「奴ら、攻撃手段を持っていたのか！」

ブレイクガンナーを構え、飛来するノイズを撃ち落とす。ノイズの勢いは止まらない。次から次へとノイズは弾丸の如く襲ってくる。後ろには、未だに自衛隊がいた。早速、彼には避ける選択肢がなかった。

「クツ……」

失態だった。バイラルコアを再びセットする隙がない。この状況は不利だ。

そこへ、巨大なノイズが追い討ちをかける。その腕を横に振るいチエイサーを薙ぎ払おうとする。今まで避けることが出来なかった彼はどうする事も出来ず、まともに食らう。

「グアアアア!？」

巨大なノイズに、退けられる。木々をなぎ倒しながら吹き飛ばされ、何本目か分からない木に衝突してやっとその勢いが収まった。

チエイサーの装甲にダメージが入り、火花が散る。

「グウ……ッ」

だが、そこはロイミユード。ダメージは受けても痛みは無い。早期復帰とまでは行かないが、膝を突きながらも立ち上がってブレイクガンナーを構えた。

まだ巨大な方を含め、ノイズは残っている。ここで止めるわけにはいかない。

「……やってくれたな」

巨大なノイズをに睨みつけ、バイラルコアをブレイクガンナーにセツトしようとしたが、突然やって来たヘリコプターを見てその手を止めてしまう。

メディア関係の物かと思っただが、何かが違った。
すると――

『――天羽々斬』

歌が辺りに響き渡り、ヘリから光が降下してきた。その光はゆつくりとノイズの目の前まで降下していくと、途中で光が収まる。そして、完全に光が消えると同時に中から青い髪の少女が現れた。

「……何だあいつは？」

ヘリはノイズから距離を取って浮遊している。どうやらこちらを監視しているらしい。チエイサーはヘリから降りてきた少女を見る。背中まで届く青い髪と体にピツタリと張りついた衣装。部分部分に機械的な装飾と手には一太刀の刀が握られていた。

まさかそれで戦うつもりでいるのか。ノイズに通常攻撃は無効。無駄死にするだけだ。

「そこを離れろ……俺が相手をする」

チエイサーの声は少女に届いたのか、彼女は彼の方を一瞥してノイズに剣を構えた。

『――去りなさい。無想に猛る炎』

少女が歌を歌う。

ノイズの大軍に突撃。当然周りをノイズが囲う。だが、彼女は恐れなかった。その場で逆立ちをして足を開く。足からブレードのような武器が展開され、片手を軸に回転。周囲のノイズを切り裂いた。

『——嗚呼絆に、全てを賭した閃光の剣よ』

次に上へ跳躍。上からノイズを見下ろすと、後ろからいくつもの剣が出現。それらが弾丸のように放たれ、大型ノイズを除いた全てのノイズを掃討する。

『——四の五の言わずに否、世の飛沫と果てよ』

残るは大型ノイズ一体。

勢いを付けてもう一度跳躍。更に高く飛び、大型ノイズの上を行く。太刀を両手で握り上段に掲げると太刀の形状が変わり大剣に変形、葵い雷をまとう。そのまま勢いよく振り下ろし斬撃を飛ばす。ノイズは両断されその場に崩れ落ちた。

「まさか人間がノイズを倒すとはな……」

ノイズの大軍をたった1人で。それも圧倒的な力で殲滅し、あつという間に終わってしまった。それ故にチェイサーは目の前の少女を警戒した。

「しかし、ノイズに対抗策があるなど……」

そんなこと2年の間、聞いたことなんてなかった。

ノイズを全て倒すと少女は振り返って、チェイサーを見た。こちらへ歩んでくる。その手には太刀の形に戻った武器を持っていた。彼女もまた、目の前のチェイサーを警戒していた。そして、その目には

若干の敵意もある。

「貴方が……やっとな姿を見せましたね」

「なんの話だ？」

チエイサーの元へ来て、少女が初めに言ったことはそれだった。彼からすれば意味のわからない話だが、どうやら相手は自分のことを知っているらしい。

「大人しく投降して下さい。そうすれば手荒な真似はしません」

屈辱

「断る」

葵い髪の少女へ向かって言った第一声がそれだった。
少女の顔つきが険しいものになる。

「どうしてかしら？」

「貴様がノイズを倒したからだ」

その理由は至極単純。だがそれ故に重要なことだ。

「ノイズに有効な対抗策は無い筈だ。だが、貴様は今俺の前でノイズを倒して見せた」

今まで、ノイズに有効な対抗策があるなんて話はなかった。ましてや、人がノイズを倒した事例なんて聞いたことがなかった。

何らかの強力な兵器を使ってなら話は変わるかもしれないが、やったのはただの人間だ。腕っ節で変わる話ではない。

そこでチェイサーは少女の他とは違う衣装とその手にある武器を見た。

「どうやらその姿に秘密がある様だが、それを何故隠す？　ここへ来るのにヘリを使っているところを見るとそれなりの組織があるのだろうか」

ノイズに対抗できる術を持っているのにも関わらず、その事実を隠蔽している。それは真実とは異なる嘘の情報を垂れ流している。

チェイサーはこの少女とその後ろにいる存在に対して危険視以外にできなかった。

「何故真実を隠す？」

「……それは貴方がこちらへ来てくれれば分かることです」

「断る」

断固として少女の誘いを断る。

今のチェイサーにとって、目の前の少女は脅威の対象だった。世間に偽った事実を出回している連中はろくなものではないと言うのが彼の答えだった。

「人間が望むならその通りに動こう。だが悪の人間の言う事を聞くほど、俺は忠実には作られていない」

少女の面構えが一層険しいものになる。そこには怒りも滲み出ている。

「好きに言ってくれてますが、それは貴方にも言えることでしょうか？」

その手にある太刀をチェイサーへ向ける。

「どこの差し金かは知りませんが、ここには私達があります。これ以上、勝手に掻き回すような真似は許しません」

「理解不能だ。俺は人間の脅威を始末しているだけだ」

「そんな意味の分からないことをよくも……」

より鋭い視線がチェイサーへ向けられる。

「これが最後です。投降しなさい」

「何度聞こうが同じだ」

刃を向けられようと全く心の振れないチェイサー。
感情の入っていない声で、顔は仮面で隠れて見えない。少女には目の前の相手が不気味に思えた。

「――なら、力尽くで貴方を拘束します」

瞬間、間を切り詰めて少女が斬りかかる。チェイサーは咄嗟にブレイクガンナーで受け止めた。

「待て。人間とやり合うつもりは無い」

「言葉のやり取りでは平行線です！」

剣の猛攻がチェイサーを襲う。だが、その一撃が繰り出される度にブレイクガンナーが防ぐ。鏝迫り合いが始まり、かち合う度に火花が散った。

「やむを得んか」

また剣とブレイクガンナーが衝突した時、チェイサーがそのまま勢いで少女を押し返して距離を作る。

[gun]

ブレイクガンナーを構えてトリガーを引く。力はあるても相手はただの人間。当てはしない。威嚇程度に弾をばら撒く。が――

「そんなもの！」

近接武器と相手する場合、距離を取るのが策だが今の相手には意味がなかった。

少女は上へ跳躍することで弾丸を回避。チエイサーを上から捉えると、後ろからいくつもの剣が現れて放たれる。

「あの時の攻撃か……！」

降り注ぐ剣の雨をブレイクガンナーで撃ち砕く。撃ち損ねたものは打ち砕くか回避で対応する。

全ての剣の雨を防ぎきる。だが、少女の攻撃は止まない。さらに巨大な剣がチエイサーの頭上目掛け降ってくる。

「何でもアリか——！」

更にそれに加え、その周りから再び剣の雨が降り注ぐ。回避経路を潰された。確実にあの巨大な剣を当てる気がしない。

「ならば——！」

だが、手の内が無いチエイサーではなかった。ブレイクガンナーの銃口を力強く手に押し込む。

[execution—break]

ブレイクガンナーとそれを握る腕が紫電を帯びて紫色に鈍く光る。そして姿勢を低くして、拳を構えた。

「ハアッ！」

迫りくる巨大な剣にその拳を繰り出し、ブレイクガンナーと衝突し

て爆発を起こす。巨大な剣は爆発の炎に吞まれ砕け散った。



正体不明の人型と対峙していた葵い髪の少女、風鳴翼は爆発の炎を回避して地面に着地した。

「まさか天ノ逆鱗を耐えるなんて……」

必殺の威力を持つ天ノ逆鱗を受け止められ、更には打ち負けたことに怒りと屈辱を覚えていた。

「……やつは？」

辺りは燃え上がる火災と灰だけ。謎の人型は影も形もなかった。あの爆発に卷込まれたなんてことは有り得ない。逃げられてしまった。

「くっ……」

逃げられた。受け入れがたいその事実には彼女は憤りを感じる。程度はさておき、人型は手負이었다。それなのに反撃してきたのは天ノ逆鱗を放ったその時だけ。手を抜かれた。これを屈辱と言わずになんと言うか。

「はい——」

装着された機械を通して耳に通信が入る。きっと、勝手な行動をしたことについてだろうと思う。

「はい、申し訳ありません。はい……では——」

短く、簡単に返事をして通信を切る。内容は予想通りだった。そんな通信なんかよりも、今の屈辱の方が彼女にとって重要だった。

「…………この屈辱は、絶対に忘れない！」

拳を握って、その屈辱を噛み締める。

見にまとうギアの力を解いて私服の姿に戻ると、自分を回収するために帰ってきたヘリに向かう。

「次は、必ず！」

この日味わった屈辱は決して忘れることなく、彼女を強くするこ
とになるだろう。

追跡

昨日のノイズ発生の騒動も終わり、自衛隊の働きにより死傷者はゼロ人となった。表向きでは、だが。

葵い髪の少女の一件もあって、今日は目立つような行動はしないようにとっていたチェイスだったが、あるトラブルに直面していた。

「どこまでもどこまでもついて来やがって……」

チェイスに背を向けたまま、拳を握って肩を震わす少女。

「俺を避けたのはお前だ。非はそっちにある」

「んだとオ!? ぬかしてんじゃねーぞストーカー野郎ツ!」

振り返って罵倒を吐く。顔も赤い。どうやら相手は今、怒っているらしい。そして誤解もされている様だ。ここはまず、誤解を解くところから始めなければ。

「俺はただお前を追いかけただけだ。ストーカーではない」

「なっ、……それをストーカーって言うんだよオ!」

誤解を解くどころか、更に激情させてしまった。原因を模索するが、チェイスには分からなかった。

どうしてこうなってしまったのか。その原因は今から数時間前にさかのぼる。



正午を過ぎたストリート街。今日は平日だと言うのに道や店の中

は多くの人で溢れていた。

そんな人混みの中に溶け込むようにチェイスが紛れこんでいた。

(やはり、昨日のことは隠されているか)

隠されていると言っても全てがという訳では無い。事実、昨日のノイズ発生事故についてはメディアが既に広めていた。

だが彼の目、耳に入ってくるその情報は実際のものとは異なっていた。

メディアが広告したものを要約すると、『自衛隊の働きにより死傷者はゼロ』そこに自分のこと、少女のことは取り上げられていなかった。

(あれだけのことが起きても情報を操作できる力を有している。それなら)

そこで一つの可能性が浮き上がる。ノイズに対抗できる力。そして、情報を隠蔽工作できるほどの権力を持った組織があるのだとしたら、そこに自分の欲しているものがあるのではないかと。

(合理的ではある。だが、)

確実に彼の欲しているものはあるだろう。隠蔽工作がされていると知った今、手探りで情報を手に入れるよりもそのことについて熟知している場所に直接出向く方がリスクを伴うとしても確実だ。だが、その事実がリスクを伴ってまで必要なものなのだろうか。そう考えれば完全に合理的とは言えない。

(それに加えコンタクトを取ろうにも場所を知らん)

これに関しては昨日のように向こうが来てくれなければどうにも

ならない。そしてまた現れてくれる日はノイズが発生した時。少なくとも当分は会えない。

更に加えて、昨日の少女の発言と交戦してしまったことを考えると向こうは少なからず気がたっているだろう。当分は会わない方がいい。

(どこに潜んでいるかも知れん。今日は目立つ行為は避け)

「よろしくお願いしまーす！」

唐突に横から人の手が前に入ってきた。その手には中に紙の入ったポケットティッシュがある。

「俺には必要ない」

その手を避けて先へ進む。

「勧誘という奴か」

少し前の方を見た時。人混みが空いていたところにいる少女が下に何かを落として気づかず先に行ってしまう。

近づいて拾うと、正体はビーズで作られた小さなリングだった。

「落とし物か」

道の先を見るとまだこれを落とした少女はいた。まだ間に合いそうだ。

「落とし物は持ち主に届けなければいけない」

そしてチエイスは手にリングを握ったまま少女の後を追った。し

かし、どんなに追いかけてようと少女に追いつくことができなかつた。途中、色々な店に入つては出て入つては出て、狭い路地に突然入られてを繰り返してやっと自分が避けられていることに気づいた。

「どこまでもどこまでもついて来やがつて……」

それでも諦めずに追いかけて、やっと立ち止まってくれた時には街から離れた公園にいた。



そして今に至る。

「それをストーカーって言うんだよオ！」

訳も分からず怒る少女。怒りで興奮状態の様だ。未だに訳の分からないことを喚き続けている。今は何を言つても逆効果だと知つたチエイスは少女が落ち着きを取り戻すまで黙ることにした。

「ハア……ハア……」

「落ち着いたか？」

「るせえええ！ 誰のせいだと思つてやがる！」

息が少々荒いが、話が聞ける程度には落ち着きを取り戻してくれたようだ。

「自業自得だ」

「んだとオ!?!」

もう日は暮れ始めている。また相手の沸点が上がってしまえば夜になりかねない。こんなことに時間をかけたくなかった。

「茶番はこれで終いだ」

「どの口が言いやがる……いいぜ、やってやらあ！」

キツとチエイスを睨むと服のポケットに手を入れて何かを取り出すようにする。

「アタシにこんなことさせて、後悔させてやるからなあ！」

「ッ!？」

その言葉を聞いてからのチエイスの行動は早かった。少女がポケットからそれを取り出すよりも早く接近してその手を拘束して見せた。

「な!？ は、離せ！」

手を振り解こうにも上手くいかない。そこで離れさせようとチエイスの身体を押ししたり、足を踏んだりするがビクともしなかった。

「落ち着け。早まるな」

「この状況で落ち着けるかよ！」

「話を聞け。警察は俺の望むところではない」

「……はえ？」

疑問符のついた変な声を出したのを最後に少女の動きが止まった。抵抗する素振りも見せない。どうやら落ち着いてくれたようだ。

その様子を見て大丈夫だと判断したチエイスは片手の拘束を解く。握ったままだった手を開いて中のリングを見せた。

「お前がこれを落としたりしたのを見た」

その手の中の物をみて少女の顔が呆れ果てたものに変わる。

「……………こ、これアタシに届けるために追いかけて来たって言うのか？」

「そうだ」

「……………はあ!？」

驚く声を上げる。ようやく誤解していたことに気づいてくれた。

チエイスは開いた手を少女に差し出す。

「落とさないように気をつけろ」

「え?……………あ、ああ」

困惑しながらもリングを受け取ると、それをまじまじと見つめている。きつと大事な物だったのだらうと彼は思った。

予想を超えて時間がかかってしまったが、チエイスはやり遂げた達成感を感じていた。

「時間を取らせてしまったことは済まなかった。用は終わった。俺は行く」

「お、おい——」

その時。少女が呼び止めようとした声に避難警報が重なった。

ノイズの死神

避難警報が街全体に鳴り響く。その時までであった平穏さは崩れて騒然としたものに変貌をとげる。街中で友人と何気ない話しを交わっていた学生、買い物を楽しんでいた家族や恋人、車で走行していた会社人それら皆が手荷物を投げ捨て、車を置去りにして、我先にと地下シェルターへ避難する。シェルターに繋がる入口は各所に設けられているが、その大きさは特別大きい物ではない。列を作らない大勢の人間が一斉に中に入る事なんて出来る筈がない。入口を目前にしてトラブルが起きて、更にパニックが起きる。

至る場所で起きた騒動は、街から離れた公園にいたチェイスのところにまで届いていた。

「なぜ立て続けにノイズが発生している」

ノイズは特異災害として認識されており、その遭遇率は、東京都民が一生涯に通り魔事件に巻き込まれる確率よりも下を回る。だがどうだろうか、二年前に1度、更に昨日と今日とであわせると既に三度もノイズが発生しているではないか。

もはやそんな確率など当てにならない。

「行かなくては」

今回も捜査に当てていたバイラルコアからノイズの発生している場所の座標が送られてくる。送られた座標を確認すると信じがたいことに、それは都市部の中心で起こっていた。

こんな場所にいつまでもいてはいけない。早く人間を救いに行かなければ。

「お前もシェルターへ避難しろ。どうやらここには入口は無いようだが、探せばあるだろう」

少女へ向けて言葉をかけるが反応が返ってこない。そちらを見てみれば、彼女はその場に立ち尽くして呆気にとられた顔でチエイスを見ていた。

何故反応がないのかと思うチエイスだが、そんなことに構っている場合ではない。警告はした。それにたとえ少女がこの場を動かなくても向こうでノイズを殲滅すればここは安全な筈。

「ここにいっても死にはしないだろう。だが、万が一のこともある。早くここから立ち去ることだな」

「!? お、おい待てよ——」

チエイスもここから離れようとするが、少女が突然慌てたように彼の手を掴んだ。

「離せ、何をする」

「何をするじゃねーだろ！ 警報聞こえてただろ、死にたいのか!?!」

少女のその反応は当たり前のことだろう。ノイズに触れれば一瞬にして灰になる。そんな場所にこれから向かおうとする輩がいればそんな反応もする。

だが、チエイスにはその言葉の意味が分からず、気づけなかった。

「俺は死なない」

「じゃあ何しに行くってんだッ!」

「人間を救いに行く」

「んなもんオマエがやんなくても自衛隊とかがやるだろ！ 行く意味なんかあるか！」

彼女の意見も最もだ。現に昨日、ノイズが発生した時いち早くその場に駆けつけノイズを食い止めようとしたのは自衛隊だ。しかし、今回は都市部だ。しかも中はパニックに陥った人々で溢れている。簡単には駆けつけることができない。

「それは間違っている。意味の有無は必要ない」

「んじゃ、何だって言うのさ!!」

「人間を守る。それが、俺に架せられた使命だからだ」

こんなところで口論を述べている場合じゃない。こうしている今もノイズは進行し人を襲っているに違いない。早く急がねばならない。だが、それを目の前の少女が邪魔をする。

もうなりふり構っていられなかった。チェイスは腕を振って強引に彼女の手を振り払うとブレイクガンナーを取り出して手の内に押し当てた。

「break・up」

チェイスの身体に紫電がまとい、彼は魔進チェイサーへと姿を変える。

それを見せられた少女は驚愕して、言葉を失った。こんな物を突然見せられればそうなるのは当たり前前だ。

「これ以上は付き合いきれん」

ブレイクガンナーにバットバイラルコアをセットする。

「Tune・chaser——bat」

チエイスの背中から金属の羽根が生える。

「なんだよ、その姿……応えろよ！」

チエイスは何も話さない。彼はもう少女のことなんて見ていなかった。背中の翼を大きくはためかせて上空へ飛翔して、ノイズのいる都市部へ飛んでいってしまう。

残された少女はその場に立ち尽くして、歯を食いしばり拳を強く握りしめた。

「なんなんだよ……」

底から湧き上がる感情に任せて一人叫ぶ。片手に感じた硬い感触に気づいて手のひらを開く。あったのはチエイスが届けたビーズのリング。

「何なんだよ……」

それを見て、この公園に来るまでの経緯を思い出してしまい、よく分からない感情が湧き上がってくるのを感じた。

「何なんだよ……」

これは落としたんじゃない。捨てた物だった。そんな物を届けるためにあの男はここまで追いかけてきた。

いつまでもどこまでも追いかけて来るのをてっきり彼女は——

「何なんだよアイツはア!!!」

少女の中で何か弾けて、何も考えられず、ただただ衝動に駆られるように次の行動に出た。

「クソッ！」

腕を大きく振り上げて、手にあつたりングを地面に投げつけた。



ノイズ発生により大パニックが起こっている都市部内。道路に乗り捨てられた自動車が道を塞ぎ、自衛隊等も含む救助隊の支援を送らせている。こうしている今も避難の出来ていない人々がノイズに襲われて灰に変えられていた。

「死にたくない助けてえ!!!」

「置いていかないでえええ!!!」

「いやああああ!!!」

男性、女性、大人、子供がノイズに襲われて何も抵抗できずにただ悲鳴を上げて灰になり崩れ落ちる。

何人、何度それを繰り返してもノイズの進行は止まらない。そこに人間がいる限り、ノイズは留まるところを知らない。

「パパあ……ママあ……どこにいつちやったの……」

生物的思考が無く、ただ機械的に与えられたプログラムを実行するように行動するノイズ等に例外は無い。故に、親とはぐれて怯える幼い子供にも奴らは平等に迫り来る。子供の周りを大量のノイズが囲

い込んで、まるで何かの漁のように四方八方から詰め寄せる。

「やだよお……こないで……」

言語を持たないノイズはその言葉を聞こうとも理解しようともしない。ただやることをやる。それだけ。

幼い子供には自分が死ぬなんて想像は出来ない。しかし、恐怖は芽生える。自分がこれからどうなるかも分からない状態で訪れる正体不明の恐怖。そんな状況の中でも誰もができる行為。助けを求めることはできた。

「助けてえー！」

救いを求める声は恐怖で怯えて震えていた。

「助けてえ!!」

けど、救いを求める。それしか出来ないから。辛くて怖いものから逃げ出したかったから。

「助けてえ!!!」

救いを求める子供の脳裏に浮かび上がるのは幼稚園の先生でもない。友達でもない。優しい祖父でも祖母でもなく、母親でも父親でもない。

子供の求めた救いの正体は、テレビの中で見たかっこよくて憧れたヒーローだった。

『俺が守って見せよう』

雨のように上空から紫色の光弾が降り注ぎ子供の周りにいたノイ

ズを全て撃ち抜いた。突然上空からの攻撃を受けて穴を開けられたノイズは、まるで電池が切れた玩具のように動きが止まって灰になる。

「あ………れえ………？」

それは子供も同じで、突然起きたことに何がなんだか分からなくなっていた。今まで囲っていたノイズが全部いなくなったことで突然消えた恐怖。上から雨が降ったらノイズがいなくなった。それが今の子供の感想だった。

何も状況が飲み込めない子供は一瞬だけ雨の降った空を見上げる。日の暮れ始めていた空には他のものとは違う黒い点が一つあった。それがだんだん大きくなって、目の前に落ちた。

『俺がお前を——人間を守る』

上から落ちてきたもの。魔進チエイサーが着地して、ノイズだった灰が舞い上がる。

舞い上がって散って行く灰の中にいるチエイサーの姿が子供の目に映る。オレンジ色の大きな目と紫色と銀色の身体をした人型。そして背中にある銀色の大きな翼。

その姿は初めて見た。知らない筈の言葉が頭の中に浮かび上がる。

「かめん——」

『走れ』

「………えっ？」

人型の言葉を聞いた。

とても冷たい言葉だった。

でも、怖くなかった。

『絶対に後ろを見るな。行け。走れ』

「うん——！」

強くうなづいた後、子供は走り出してチエイサーの横を通り過ぎて行った。

チエイサーがその姿を確認することはなく、前に足を進めた。1歩、また1歩と足を進めていく度にブレイクガンナーを強く握りしめた。

建物の壁、道路からノイズが次々と現れる。

「貴様らがいるだけで、人間が怯え、恐怖に陥る——」

ビルが立ち並ぶため周りの状況は把握しにくいだが、恐らく数は昨日と同じかそれ以上。

今はいないが昨日のように葵い髪の少女が来るかもしれない。また剣を向けられるかも知れないが、ノイズがいる間は仕掛けてはこないだろう。

「交わす言葉も無く、理性も無い。やはり貴様らは害悪、人間の敵だ」

その時はその時だ。後のことはその時考えればいい。

今はノイズの相手だ。一秒でも早くこの害悪を始末しなければならぬ。

「人間に害をなす存在はどんな相手だろうと、俺は容赦しない」

ノイズへ向けてブレイクガンナーを向ける。

「これから俺は死神として、貴様ら害悪を始末する。人間を手にかけてたことを後悔しろ。貴様らに感情があるのなら——」

トリガーを引き、ブレイクガンナーが光弾を打ち出す。これから始まるのはチェイサーによる一方的な攻撃の猛攻。脳の無いノイズはこれに圧倒されて殲滅されるだろう。

ノイズに勝ち目は微塵も無い。

「俺に恐怖しろ」

死神による死刑宣告が放たれた。

始動

夕焼けの日差しが降り注いでいるとある都市部の中心部。ほんの数分前まで多くの人で賑わっていたその場所は、ノイズの発生によりゴーストタウンと化していた。道路にドアの開けられたままの車の数々と辺りに散らばっているカバンや商品が入ったままの買い物袋の中には片足だけ脱ぎ捨てられた靴もあった。

そして、ジユウタンのように道に広がっている大量の灰。それは、そこらに転がっている物よりも目立っていた。

ノイズと接触した人間は炭素化が始まりものの数秒で灰となる。そして逆もまた然り。

街に広がる灰。これは全てはノイズである。

「逃がさんー!」

立て続けに鳴り響く銃撃の音。そして、続けて鳴り渡る硬いもので殴ったような鈍い金属音。その後には大量の灰が残っていた。

ノイズで溢れているゴーストタウンの中を一人、魔進チエイサーが駆ける。

「break」

ブレイクガンナーをブレイクモードに切り替えてノイズの群れに襲いかかる。

「フンッ!」

一体目、ノイズの頭上へブレイクガンナーを振り下ろし叩き潰す。

二体目、ノイズの胸へブレイクガンナーを打ち大穴を開ける。

三体目、勢いを殺さずブレイクガンナーをなぎ払いノイズの上半身を粉碎する。

四、五、六体目も同じ容量で叩き潰して粉碎する。
地上のノイズが昨日のように自らの形を変えて弾丸と化して襲い
かかる。その数、十体。

「gun」

ブレイクガンナーをガンモードに切り替えて一体一体を的確に撃ち抜く。風穴を開けられたノイズは灰となって空中で形を崩して無くなる。

少量の灰がチェイサーの頭に降りかかる。それを特に気にする様子は無い。辺りを見渡すが、この一帯は今度こそ出現してくる様子はない。

「次だ」

だがまだ終わっていない。それを証明するように遠くで騒ぎが聞こえる。急がなければ。

「Tune・chaser——bat」

バットバイラルコアをブレイクガンナーにセット。背中に巨大な翼を生やして上へ飛翔する。同時に地面に広がっていたノイズだった灰が煙りのように舞い上がって、その更に上へチェイサーが行く。その後に残ったのは、荒れ果てた街の景色と広がるように散乱した大量の灰。死神の通った後のそれは、廃墟そのものだった。



『生きるのを諦めるな——！』

あの日、あの時……間違いなく私は、あの人に救われた。

私を救ってくれたあの人は、とても優しく、力強い歌を口ずさんでいた。

「ハア——、ハア——、ハア——……」

とあるビルの上で、幼い子供1人を引き連れた少女が大の字に身体を広げて仰向けに倒れていた。子供も少女も呼吸が荒く、とても辛そうに息を上げている。死にもものぐるいでここまで来たことがその表情から分かった。

「死んじやうの……?」

とても怯えた子供の声が隣から聞こえてきた。

少女は身体を起こし子供を見る。大丈夫だよ。と、言っただけで逃げた。少女は身体を起こし子供を見る。大丈夫だよ。と、言っただけで逃げた。少女は身体を起こし子供を見る。大丈夫だよ。と、言っただけで逃げた。少女は身体を起こし子供を見る。大丈夫だよ。と、言っただけで逃げた。

——だが、それもつかの間。

「——ッ!?!」

次の光景を見て、少女も子供も驚愕の表情へ変わる。目の前の光景には、おびただしい数のノイズがいた。

「そんな——」

「おねえちゃん!」

怯えた子供が少女へ抱きつく。

ノイズに囲まれて道をふさがれ、今いる場所はビルの屋上。逃げ場なんてない。極度の緊張と恐怖がのしかかり、額や手から汗がにじみ出て、呼吸がみだれてまた苦しくなる。目の前から詰め寄ってくる恐怖。そして、死。脳裏に浮かび上がるのは、ノイズに襲われて灰になっていく人の姿。そして二年前の――

『死ぬな、生きろ』

突然頭の中で再生された声。それは、耳元で囁かれるように突然聞こえた。冷たくて何もこもっていない男の人の声。だが、それが彼女をつき動かした

「大丈夫、大丈夫だから！」

自分に抱きついていた子供を両手で引き寄せる。

「私が、お姉ちゃんが守ってあげるから――」



夕方、私立リディアン音楽院の講堂でこのことだった。今日一日の授業全てを終えて他のクラスメイトが帰っていくなかで、立花響が親友と話しをしていた。

「それ、もう少しかかりそう？」

机にうつ伏せになりながら、顔色を伺うようにして親友、未来の様子を見た。

そんな彼女の視線に気づきながらも未来はノートに板書をつづっている。他のクラスメイトは、授業道具をしまつて帰宅の準備をして

いるというのに、今もノートに筆を走らせているのは彼女くらいだ。
ふと何かを思い出して、手を止めて顔を上げる。

「うん。ん、ああ、そうか。今日は翼さんのCDの発売だったね」

風鳴翼。今日はその人のアルバムの発売日だった。

「でも、今どきCD?」

「初回特典の充実度が違うんだよ、CDは〜」

未来も色々な歌や音楽を聞くが、その入手方法はダウンロードだ。
しかし、隣にいる響はどうやら違うらしい。

何でもインターネットで揃えられることが出来る世の中。その中
でも音楽等の形の無いものはボタン一つで簡単に手に入ってしまう
のに、彼女のようにわざわざ自分の足で買いに行くのは今どき珍しい
のかもしれない。

「だとしたら、売り切れちゃうんじゃない?」

「うぎゃ!?!」

素朴な疑問だったが重要なことだったらしい。変な声を上げて、慌
てて立ち上がった。

「ごめんミク! 私行かなきゃ!」

「う、うん? 気をつけてね。さ——」

「じゃまた後でね!」

最後まで未来の話しを聞かずに、響はカバンを持って言ってしまった。未来はそんな慌ただしい彼女の様子を目で追っていく。入口で入ってきた人とぶつかりそうになったりと、相変わらずだが危なっかしい一面がいつもよりも目立っているように見えた。慌てながらも謝って入口から出て行った。

そこで響の姿が見えなくなった。

「あ……」

きつと、CDの発売日だった今日のことがとても楽しみだったのだろうと思う。目の前のことに集中して周りが見えなくなることが、彼女の良いところで、悪いところでもあった。

「きつと、大丈夫。だよね……?」

その時の未来は、昨日のノイズ発生事故を思い出していた。自衛隊の活動で市民への被害は無かったとの主旨を報道ニュースで聞いたが、それが胸に引つかかるような形で不安になっていた。

ノイズとの遭遇率は通り魔との遭遇率よりも低いとされている。その証拠として、あるときから今日までで発生したのは昨日のが初めてだ。

しかし、それでも何となく思ってしまう不安があった。

「ううん、大丈夫。昨日あったんだから今日は、きつと……」

ノイズの発生は増えている。そんなありえない筈のことが不安に変化して体に重くのしかかってくる。

もしも、またノイズと出会ってしまったら。あるとき、二年前のことを思い出すと胸が苦しくなった。

「考えすぎ……なんだろうな」

気づけば周りにいた筈のクラスメイト達は皆帰ってしまったっていて、彼女一人だけが残されていた。賑やかだった教室が、一変して物静かなものになっている。

「よし、早く終わらせて響の帰りを待たなくちや！」

頭を振って切り替えて、再び机と向き合いノートに筆を走らせる。家で待っていれば、お腹を空かせた響が帰ってくる。そしたら、一緒にご飯を食べて、またいつもの通りになってくれる。そう、彼女は信じていた。



夕方の空の下、街中では学校や会社帰りの人達で溢れて、友人と遊んだり帰宅を選んだりと人それぞれの時間を過ごしている。そんな街中のストリートを駆けている彼女、立花響もまたその内の一人である。

「CD、特典——」

学園を出てから今までずっとこんな調子である。息を切らしながらも同じ言葉を連呼して、彼女にとっての今回のCD発生がどれほど楽しみなものだったのかが誰が見ても分かるだろう。しかし、ここまでの領域は流石に子供でも無いのではないだろうか。

「CD、特典——。CD、特典——」

彼女のようにクセのあるものもある。でも、それが人それぞれの当たり前の日常。有り触れたものもあれば、貴重な時間であったりすることもある。で、あるが故なのだろう。そんな日常に変化が訪れること

なんて思いもしない。ましてや、今この瞬間に当たり前となっていた日常が崩れるなんて、誰が思うだろうか。

すでに訪れた崩壊の足音。彼女がその事に気づいたのは角にあったコンビニを曲がった時だった。

「え、——」

目の前で黒い灰が舞う。足を無意識に止める。

多くの人が集う都会で灰が舞うことなんて有り得ない。そして、不自然に消えた街の賑やかさ。遅れて周りに人がいない事に気づく。今までであった高揚感は無くなって、緊張がほとぼしる。

街中に避難警報が鳴り渡り、最悪の事態を知らされた。

「ノイズ!？」

周りにも店の中にも人はいない。その代わりにあるのは山に盛られた灰。中には人の形を型取ったような形ものまで……。

最悪の中でも最も最悪。今自分がいる場所はノイズの発生源。

生物としての本能が働いて、その場から逃げろと身体を動かそうとする。だが、離れた場所でその場でうずくまる子供を見つけてしまった。

(行かなきゃ!)

本能を振り払って子供の元へ駆け寄る。

通り過ぎて行ったのか、幸いにもノイズの姿は見えなかった。響は子供の前で屈むとその肩を揺すった。

「大丈夫!？」

「こわいよおねえちゃん!」

怖くて動けなかったのだろう。肩を揺すられて子供が響の存在に気づくと大粒の涙をこぼして彼女に抱きついた。

「大丈夫まだ間に合うから。一緒にシエルターにいこ——」

子供と手を繋いで立ち上がった時、それは目の前にいた。

アスファルトの表面から、建物の壁から滲み出るようにノイズが現れていた。

「そんな!？」

警報が流れてから今まで見えなかったのに。まるで、子供をエサにして獲物がかかるのを待っていたかのように突然現れた。

側の建物の影。そこに路地を見つけた。

「ッ! こつち!」

戸惑っている訳には行かない。立ち止まっていれば、先にあるのは死。

響は子供の手を引いて路地へ駆け込む。光の入りにくい路地の中は薄暗くて狭い。清掃がされていないのか、足元が少し滑りやすかった。

それでも足を止めずに路地の先にあつた光へ向かう。しかし——

「ウソ!？」

その先にあつたのは流れの早い用水路。その左右に続いている路地と壁に群がるノイズ。あと少し距離が縮まってしまえば生命はない。逃げ道の無い、絶体絶命の状況。

「おねえちゃん!」

「大丈夫。お姉ちゃんが、ついてるから！」

怯えた子供が自身に抱きつく。逃げ道がなくても切り抜けるしかない。生きるのを諦めちゃいけない。

考えるよりも先に体が動く。響は子供を抱き抱えると勢いづけて用水路へ飛び込んだ。

「プハアツ！」

水路に水しぶきが上がって、口や鼻から水が入ってむせ返る。突然とった行動だったが、結果的にノイズの手から逃れることができた。しかし、それも一時的に過ぎない。

「ゲハツ——、早く逃げないと……」

辛うじて足が下についているが、流れが強いため上手く動けない。更に抱き抱えている子供が重しになってよけい動きにくくなってしまふ。それでも、もがくように少しずつ水路の向こう側に近づいていく。

「くう……」

足が滑り流されそうになって、必死に踏みとどまる。焦りが彼女を急がせ危うくなくなってしまふ。

今まで黙っていたノイズではない。一体目が水路に入ると二体、三体と続いて入る。響が水の流れに苦しんでいるというのにノイズにはそんな様子は無い。

「プハアツ！ あ、上がって……」

やっと向こう側について、抱えていた子供を上にする。何とか子供を水から上げることが出来て、自分も上がろうとするが水の流れに負けて上手く体が動かない。

「こんな……ところで……」

「がんばっておねえちゃん！」

何も掴める物がないコンクリートの地面にしがみついて必死に上がろうとするが力が入らない。勢いのある水の流れと冷たさで体力が失われてしまっていたのだ。

直ぐ後ろにはすでに沢山のノイズがいた。

(ダメ……間に合わない……)

諦めちゃいけないと自分に言い聞かせるが思うように体が動いてくれない。不安な顔でこちらを見つめる子供がしがみついている手を引っ張ってくる。そんなことをしてはダメだ。アナタだけでも逃げて。その言葉を口にしたくても水が邪魔をして話せない。

「に、きげ……にげ、て！」

辛うじて口にした言葉はその一言。だが水の流れる音にかき消されてしまい、すぐそこにいる子供にも届かない。

(だめ、あきらめちゃ……いけないのに……)

ついに握力も弱まって、ジリジリと水路の方へ戻されていく。

もう無理なんだと、心のどこかで芽生えた弱音が彼女の気力さえも奪って行く。だが、諦めたくなかった。

(た、すけ……て……)

心から出る願い、叫び。走馬灯のように頭で再生される二年前の記憶。コンサートホールでノイズと闘って歌っていたツヴアイウイングの二人。いつ見たか憶えていない夕焼けの空の記憶と、そして――

『死ぬな、生きろ』

それは突如、上空から降ってきた。爆音と同じ音が響いて大量の水しぶきが上舞い上がる。続いて鳴る銃撃の音と水の中も分かるくらい濃い硝煙の臭い。

「……な、なに!？」

水しぶきが治まって、舞い上がった水が雨のように降り注ぐ。

灰が水路を流れていく。響は振り向いて水しぶきを上げた正体を見た。紫色の装甲を持った体。でも、人じゃない。右手には銀色の大きな物がついていて、体についた装飾は機械のそれだった。

(ロボット……?)

彼女の視線に気づいてか、それは響の方を振り向いてその顔をみせた。

オレンジ色の大きな目と機械のエンジンをそのまま使ったかのようは頭部。敵意をそのまま形にしたようなものを感じ取りゾツとした。

『何をしている』

「……へえ?」

低く同じ音程の声。感情がない。さながらロボットの声だった。

『子供を置いて逝くつもりか?』

「ッ!？」

とても冷たくてただ発声しただけの音に近い声。だが、その言葉にあつた意味は今の彼女を動かすには十分すぎる威力を持っていた。力の入らなかつた体に熱が入る。

（あきらめちやダメだ——）

水路から手を出して地面に両手をつける。

（私がこの子を助けなきゃ——）

腕に力を入れて上半身を水路から外へ出す。足をかけて、這いずりながら下半身も外へ出す。

「生きることを諦めちやダメなんだ！」

やっと水路から抜けだせて立ち上がる。疲労感が襲いかかつてふらつくが、顔を叩いて無理やり復帰させる。

そばにいる子供を助けない。その思いが今の彼女の動力源となっていた。

「行くよ走って！」

再び子供の手を握って路地を走り出す。後ろは決して振り返らない。止まったら走れなくなると思った。

響と子供が路地を抜けてストリートを走る。胸が苦しい。シエル

ターから離れてしまった焦りが不安になる。それでも無我夢中で走り続けて、気づいた時には道が無くなっていた。それでも止まるわけにはいかななくて、子供を背負って壁にあったハシゴを登り始めた。

「ハア——、ハア——」

息をする度に苦しくて痛かった。ハシゴを握る手が踏みしめる足が震える。

「ハア——、ハア——、ハア——」

ついに屋上に到達したと同時に体の力が抜けて倒れてしまう。痛い。苦しい。息をする度に喉から血の臭いが上がってくる。こんなことになるまで走り続けたのは初めてだった。

「しんじやうの?」

怯えた子供の声が聞こえた。

痛む身体を起こして子供の方をみる。そうとうな疲労があるのだろう。子供も自分と同じく横たわっていた。

大丈夫。その言葉を伝えてやりたくても上手く声が出ない。首を振って否定して上げることしかできなかった。

「——!?!」

しかし、つかの間の安らぎは過ぎ去り再び絶望が訪れた。

「おねえちゃん!」

さつきまで横たわっていた子供が恐怖のあまり身体を動かして響きに抱きつく。

『死ぬな、生きろ』

突然再生された声。なんの感情もこもっていない音で、さつき現れたロボットと同じような感じがした。

しかし、どこかで聞いたような。そんな不思議な感覚もあった。

「大丈夫、大丈夫だから……」

怯える子供を優しく抱いて身に寄せる。

迫り来るノイズを目の前にしても彼女はもう、諦めていなかった。

「私が、お姉ちゃんが守ってあげるから——」

胸の中が熱くなって、この子供を守りたいという気持ちが膨れ上がる。

心臓の鼓動が強く高鳴る。

(私に出来ること。私に出来ることがあるはずだ……！)

あの日の二人みたいにはやれないかもしれない。だが、それでも自分に来ることが子供を救う結果に繋がるというのなら——

「生きるのを諦めないで!!!」

その時、夜のとあるビルの屋上で、一筋の眩い光の柱が天へと昇った。

望まない再会

空を飛び、ノイズを搜索していたチェイサーは路地裏に流れる水路でノイズに襲われている人間二人を見つけていた。落ちてしまったのか、水路の中で流れに耐えていた。そのすぐ後ろにはすでにノイズが迫ってきている。

チェイサーは背中の中の翼を一度大きく羽ばたかせ、助走を足して下へ急降下。落下の速度も重なって速度が更に増す。急降下している最中、背中の中の翼を解除、収納して新たなバイラルコアをブレイクガンナーへとセット。

「Tune・chaser——」

背中から動力パイプと武装が延びたところで、チェイサーは水路の水面と衝突した。轟音と同時に大きな水しぶきが上がる。強襲に近い形で人間とノイズの間に割って入ったチェイサーはすぐさま標的を見据える。

「フンッ！」

ブレイクガンナーを振り下ろして少女に近かったノイズを粉碎。そしてガンモードに切り替えて牽制目的で光弾をばら撒く。ここまでの流れをわずか数秒で済ませる。

そうやって倒したノイズの灰が水に流されて行った時、丁度チェイサーの腕に武装が連結された。

「——spider」

上上がった水しぶきが雨のように彼へと降り注ぐ。その手に付いているのは、蜘蛛の形を模したクロー型の近接装備。

武装チエイサースパイダー。武装、フアングスパイデイ。
水路内にいたノイズは灰にした。だがまだ向こう側の路地に壁に
奴らはいる。

「何をしている」

「……へえ?」

後ろに顔を少し向ける。弱りかけているが、意識はあるし返事も返
せている。

ノイズはいつ予測不可能な行動をするか分からない。そのため、
チエイサーは目の前のノイズに集中する必要があった。

「子供を置いて逝く気か?」

ここまで二人で逃げてきたと予想したチエイサーは少女に挑発す
るように声をかける。

自分とノイズがやりあっている間に2人に逃げてもらうのが最善
と判断。ノイズと二人の人間、両方を面倒したいが昨日の二の舞い
なってしまうのは避けたかった。

結果として、少女は無理矢理に復帰。子供を連れてこの場を去って
行った。

「そうだ。それでいい」

この場に残るのはチエイサーとノイズだけ。これで遠慮なく彼は
ノイズを駆除することができる。

腕に装備したフアングスパイデイを構え、標的を捉えた。先手を
チエイサーが取り、ノイズ目掛け駆ける。

「ハア!」

ノイズの反応よりも早く動き、その腹に得物を突き刺す。そのまま強引に振り回し周りにいた数体を巻き込む。

大量の灰がチェイサーの身体にかぶる。

ノイズも黙っている筈がなく、体の形を変えたり、手についた武器のようなもので反撃する。

「無駄だア！」

得物を持って襲うならその得物ごと粉碎。弾丸となって飛びかかってくるのなら真っ向から穿つ。どんな方法で攻撃しようとも刺して、切り裂いて、砕く。

「知能の無い能無し風情が、ロイミュードに敵うものか」

串刺しにしたノイズを蹴り飛ばし水路へ落とす。まるで氷のように削れて、崩れて、流れて消えていった。

数匹が上へ跳び、二人が逃げた方へ向かう。だがその数秒後、後方より飛来した光弾に撃ち抜かれて灰になりながら落下する。

「後ろを向けるとは良い度胸だ」

罵りしかない形だけの賞賛。

後ろから飛びかかって来るノイズ。軽くファンクスパイデイを構えて振り向くついでに切り裂く。半身がチェイサーの上を過ぎて音を立てながら落下する。

「……何だ？」

振り向いてある現象に気づく。攻撃を与えていないノイズの体の色を徐々に失いながら崩れていたのだ。

過去に調べたことを振り返り、それが自然消滅だと判断する。

「なるほど。これがそれな訳か……」

下半身を失ったノイズが這いずってチエイサーへ手を伸ばす。

それは踏みつけると簡単に崩れた。感覚を確かめるようにグリグリと足元を動かす。灰と砂が混じってジャリジャリとした音が足元から伝わった。

「ここはもう終わったか」

足元のノイズと同様に周りに残っていたノイズも灰になったり、なかりかけていたりした。念を入れて灰になりかけのノイズに光弾を打ち込んで穴を開ける。

後ろへ振り返る。その先にあつたのは少女達が逃げた路地裏の道。

「……後を追うべきか」

ノイズはあの二人を追っていた。今いたノイズは自然消滅したが他のが同じとは限らない。水路を飛び越えて路地の方へ、チエイサーは二人の後を追う。

彼が去った後の路地裏。そこにはノイズだった灰が至る場所にある。しかし、あれだけ暴れた後だというのにどこにも傷痕が残っていなかった。



ノイズ発生の際の警報を聞いた時、葵い髪の少女、風鳴翼は学園の授業を終えて久しぶりの帰宅途中だった。その途中経路で招集の連絡が入って、今はある施設内にいた。

「……………」

施設内の廊下を走り抜けて、決められた場所にあるエレベーターへ駆け込む。扉を閉めてパスを機会にかざす。承認の音が鳴って周りから手すりが出てきて、これを掴む。

エレベーターが起動。グン、と落ちる感覚が襲い、下に物凄い速度で降下していく。急降下したのち扉が開いて、設けられた通路を駆けける。向かって正面にある大きな扉。自動で開いて、中へ入る。

「状況を教えてください」

「現在、情報を絞込み位置の特定を最優先としています」

その扉の先にあったのは、コンピュータ機器とわずかな光源しかない薄暗く広い空間。前には大きなスクリーンがあつて街を上から見下ろした映像が流れていた。

「……………」

スクリーンを見る。

今回ノイズが発生したのは都市部の中。今どうなっているのかわからないがこれくらいは分かった。被害は甚大だ。急いで現場に駆けつけなくてはいけない。

そして、そのこととは別に気がかりなことが一つ。

「……………人型の姿は？」

「衛星からの映像で確認しております。現在人型は都市の中心でノイズと交戦しています」

やはり人型はいた。

拳を握った。頭の中に映るのは昨日の受けた屈辱の映像。昨日のことで、記憶が新しいというのもあるが思い出すだけで腸が煮えくり返る。

「今度は逃がさない……！」

ここで、一人決心をつける。ノイズと戦うことは当然だが、彼女にはそれよりもやるべき事があった。屈辱、怒り、悔しみの晴らし、汚名返上をする機会でしかない。この場で彼女一人だけが別の観点で状況を見る。

理由がどうであれ、ノイズが発生すれば奴が現れることが今回のことで明らかになった。わざわざ探さなくてもノイズのいる場所であれば勝手に向から来てくれるという訳だ。

「あれ、この反応は——」

だからなのだろう。一人だけ別の観点から見ていたがために彼女だけが、状況の変化に気づけていなかった。それが自身にとって最も大事なことなのに。

白衣を着た女性が慌ただしくキーボードを叩く。周りにも伝わって一人を除いて皆がモニターを凝視した。

警告音と同時に出る赤字のアルファベット文字。それは——

「これって!?!」

「ガングニールだと!?!」

怒鳴り声のように上げられた言葉を聞いてやっと翼はこの問題に気づいた。

目を丸くしてスクリーンにある文字を凝視する。

ガングニール。それは共に戦った親友の槍で、もうこの世に無い

物。その筈だった。

(……どうして?)

動揺を隠せなかった。

スクリーンに映像が映し出される。そこに映っているのは確かに
ガングニールだ。共に戦った親友の力を忘れる筈がない。

ガングニールをまもっている奏者はどうやってその力を……

(……だって、それは奏の)

底から湧き上がってくる感情を抑えながら目の前のスクリーンに
映る謎の奏者の姿をまじまじと見続けていた。



路地を抜けた先でチェイサーが見た物は、工業地帯へ続く道路だっ
た。トラックなどの大型車が通ることを前提に造られた道は他のも
のと比べて広く作られている。

柵を乗り越えてその道路へ足を踏み入れる。日が沈んで街灯の光
りだけが頼りのその場所では遠くまでの様子が把握出来なかった。

「マズいな……」

これではどの方向に子供が向かって行ったのか分からない。工業
地帯の方は街の場合と違って危険物が多い。そちらの方には避難し
ていないことを祈る。

だが、状況は悪い方向へと転がっていた。

突然、夜の空へ一本の光の柱が立つ。そしてすぐに消えた。その不
自然な現象を見逃すことはなく、チェイサーも確認する。その光の柱
があった方向は工業地帯のすぐ隣にあったビルの屋上。そして光の

柱を確認したとき、屋上で光に照らされたノイズを発見した。マズい状況にあることを確信する。

「あそこかー」

ノイズがまとまって動くことはよくある事だが、それは集団で人間を囲い一網打尽にするためだ。単体で行動することはまず無い。そして、目立ての人間がいなくてところにノイズが集まることもない。つまり、ノイズがいると言うことはそこに人間がいることになる。

「耐えていろ今行くー」

即座にブレイクガンナーへバットバイラルコアをセットする。

「Tune・chaser——bat」

チェイサーの翼から金属の翼が生えて、すぐさま広げてその場から飛び立つ。幸い距離はそう遠くは無い。空へ舞い上がってから数十秒でビルの屋上の状況が分かるくらいのところまで着た。光の柱の立っていたそこにはもう何も無い。

ビルの隣にある工業地帯で爆音が鳴った。

「そこかー」

工業地帯の一角で煙りが上がっている。そこには路地裏で見つけた子供がいた。少女が子供を抱き抱えていて、ノイズに挟まれ退路を絶たれていた。片側にノイズの群れが、反対側に昨日と同じ大型のノイズがいる。

その場所目掛けてチェイサーは急降下。広げた羽を縮めて空気抵抗を出来るだけ小さくする。

ノイズの群れの前に衝突さながらの勢いで着地。同時に地面のア

スファルトが砕け、粉塵が舞う。

「な、なに？ なにつ!？」

突然の事態に少女が驚いて声を上げる。そんな彼女には目もくれず、チエイサーは上空から下りてくる時に見た景色から情報を分析。周囲に爆発物またはそれに近い危険物がなことを確認した。

今の現状、長期戦は危険と判断して短期決戦を狙う。

ブレイクガンナーからバットバイラルコアを外して背中の翼を収納。そして新たなバイラルコアをセットした。

「Tune・chaser——spider」

背中から武装と動力パイプが現れてブレイクガンナーと接続されて、武装チエイサー スパイダーとなる。

得物を胸元で構えて、武装と一体となっているブレイクガンナーの銃口を押した。

「execution・Full break——spider」

武装、ファンクスパイデイのクローの先端にエネルギーが帯電。今にも弾けそうなほどの紫電がまとわりつく。

だが、ノイズを目の前にしてチエイサーはその場から動こうとしなかった。ただそこに立ち尽くしながら、紫電をまとうファンクスパイデイを上へ掲げ、トリガーを引いた。

瞬間、バチン！ と帯電していたエネルギーが音を立てて炸裂、空中に放たれたエネルギーが稲妻の如く迸る。放たれたエネルギーは電撃の早さでノイズを巻き込み、飲まれたノイズは次々に灰になりながら四方に飛散していき、あっという間に方をつけた。

「す、すごい……」

間近で見っていた少女が感嘆の声を漏らす。突然現れて、あれだけいたノイズを一瞬で倒してしまった目の前の存在。一度に沢山起こったことに追いつけていなかった少女だったが、ここで間の前の人型がさつき路地裏で助けてくれた人だと気づいた。

「あつ——」

声を出しかけて、止まる。自分の上から大きな影が指していることに気づいて後ろを振り向く。そこにいたのは大型のノイズ。目の前で見せられた衝撃で忘れてしまっていた。

大型ノイズは頭部と思わしき部分をしたに下げて、少女を見下ろしているような姿勢をとっていた。

大型ノイズがその手を振りかぶる。

「!?!」

黙って見ていればひとたまりもないことくらい少女にも分かった。急いで離れようとするが、行動するまでが遅くて今からではもう間に合わない。それでも諦めず広がってくる影から逃げるためダツシユする。

「……………」

チエイサーはその様子を見逃していない。しかし、彼はまたその場から動こうとせずその光景を黙って見過している。

否、それは少し違っていた。

チエイサーは少女とノイズの光景を視野に入れていたが、その視線はもつと上の方へ向いていた。

「』」

透き通った声、短い唄。続いて一瞬だけ輝く眩い光。空から一振りの巨大な剣が降ってきて、ノイズを貫き地面に大きな音を立てて突き刺さる。

チエイサーはその剣の上を見据えた。そこにいたのは独特な衣装で身を包んだ葵い髪の少女。忘れる筈がない。間違いなく昨日出会った少女だ。

「……遅い登場だったな」

予想はしていたが、昨日のこともあつて出会いたくはなかった。

「やはり、現れていましたね……人型」

チエイサーにとってはそうだったが、彼女にとってはその逆。彼女の目には闘士が宿っていた。

少女の足についている装甲が展開。そこから長方形の金属の塊が射出される。彼女はそれを手に取ると変形、形を変えて一振りの太刀に姿を変えた。

上から見おろして、太刀の切先をチエイサーへ向ける。

「もう、逃がしません」

感情を殺した冷たい宣告が言い放たれた。

困惑

風鳴翼が件の現場へ向かった後、彼女がつい先程までいた僅かな光源だけの空間ではキーボードを叩く音やコンピュータ機器の読み込み音が木霊していた。今も慌ただしいが、最初の発生時と比べると落ち着きを取り戻して各個人の役職を全うしていた。

「全ノイズの消滅を確認しました。自然消滅時間に達した模様です」

「続けて現場に翼さんの到着を確認。別衛星、別カメラからの映像を入手。スクリーン変えます」

正面に設けられた巨大スクリーンに最も近い場所にいた役員が報告をして手元のキーボードを操作。そして最後にエンターキーを押すとスクリーンの映像が切り替わる。

「映像、出ます」

最初、ガングニールの少女を発見した場所の映像から切り替わって、工業地帯の様子が映し出された。この場にいる人全ての視線がスクリーンへと集中する。

スクリーンに映し出された工業地帯の様子。そこに映し出されているのは、謎のガングニールの少女とギアをまとった風鳴翼。そして、正体不明の人型の三名だった。

「……やはりこうなってしまうか。やむを得ん状況だったとは言え、これはマズいな」

暗がりの空間の中。その中で最も高い位置に立っている男が声を上げた。赤い半袖を着ていて、体はかなりの筋肉質なその男は仁王立

ちをしながらスクリーンの映像を渋い顔で見ている。

映し出されている映像の中。翼は得物を構えて人型と対峙している。一番重要な謎の GANG ニールの少女が蚊帳の外にいた。

「やむを得えん、か……」

男は胸元で組んでいた腕を解いて頭を掻いた。

そして、三步前へ前進して下を見下ろす。下を見るとコンピュータを管理している沢山の仲間の姿がよく見れた。男の視線がその中の一人を捉える。白衣を着た女性だ。他の仲間と同じく作業をこなしているが、動きは他と比べて様になっていた。

「了子君」

男に了子と呼ばれた女性は手を止めて上の方、男を見上げた。

「どしたの?」

予想しないタイミングで呼ばれたからなのか、了子はきよんとした顔で男を見た。男はとても難しい顔をしている。難しいことでも考えているのか、だがこれから何かをやるうとしてるのは何となく分かった。

まさか、と了子の思考に男がこれからやろうとすることが思い浮かぶ。

「ちよつと、もしかして!?!」

「ああ、そんなとこだ。ちよつくら行ってくる」

それだけ言って男は後ろを振り返って、翼が入ってきた時のと同じ扉へ足を進めた。

突然のことで二人の会話を聞いた周りが少し騒がしくなる。

「ちよ、算段とかあるの!？」

「任せてくれ。悪いようにはならないさ」

扉が開閉する音が聞こえた。それ以降、男の声は聞こえてくること
がなかった。

「はあ……」

「……うまくいくのでしょうか?」

男が今までいた場所目を離してため息をついた時、一人が疑問を口
にした。それはこの場にいる全員が言葉に出さなくても思っている
事だろう。彼女、櫻井 了子一人を除いては、だが。

「無策で行く人に上手くいくかいか言ってもねえー」

「え?」

どこか諦めた口調で言うと、彼女は自分の席に向き直って再びキー
ボードを叩き初めた。

この場にいる彼女以外のメンバーは突然のことに不安を抱いてい
た。その内の一人が了子に問いかける。

「無策って……それが分かっていたのにどうして止めなかったんです
か?」

「止めるって、あの人がやめてって言えばやめる人に見える? それ
に今回が初めてじゃないでしょ?」

「それは、そうですけど……」

「でしょ。確かに今回はいつもと違うかもしれないけれどあの人が任せろって言ったんだから任せていいんじゃない?」

了子は周りを見渡してみる。どうやら周りも同じことを考えている様で雰囲気あまりよろしくなかった。今言った通り、今回は今までと違ってどうなるか分からない点が多い。中でも謎の人型の存在が大きいだろう。何しろデータが無いに等しい上に現状の翼があれば皆が不安になってしまうのも当たり前だ。

「翼ちゃんとは連絡つかないのー?」

「はい……どうやら翼さん、通信機を切っている様で」

うーん、と唸りながら了子は頭を捻った。今あの人が向かっているところだがそれまでに何も起こらないということはまず無い。現場で連絡をとれる唯一の人物が連絡拒否の姿勢を取っている今、対応できる手段は限られている。

「衛星と周囲のカメラ。使えるもの全部使って情報収集をお願い。それとあの GANG ニールの子のことも調べてちょうだい」

画面に映る GANG ニールの奏者。どういった経路でそれを手に入れたかは分からないが彼女の身元が分かれば見えてくるかもしれない。人型の時と同じ何も得られないなんてことは無いと願いたい。

「あとはあの人型かあ……」

姿を現したのは今回で三回目。その全てにはノイズに敵対する形

で登場しているが、未だにまともな情報が全くないのが現状である。唯一分かっていることと言えば――

(いや、それは今後分かることか)

なんにせよ、今この現状に役立てられるものは一切ない。まともなサポートができない今、できることと言えばできる限り多くの情報を記録することくらいである。

当たり前だが、工業地帯である向こうの現場は危険物が他と比べて多い。万が一、大きな衝突があれば大惨事になりかねない。その手の人員も用意しておくべきだろう。

「そんなことならないと思いたいところだけど。今の翼ちゃん、どれだけ自分を抑えられるかしらねえ」

メデイカルチェックで、風鳴翼の状態に特に問題ないという結果に終わったのだが精神状態に関しては少なからず問題がある筈なのだ。そうでなければ通信機を自らの意思で切るなんてことはしない。

「もしかしたら人型より翼ちゃんの方が問題ありありかもね」

昨日のギアをまとった翼と人型との接触を思い返す。翼も最初の方は人型と対話での接触を試みていたが、ものの数分後には実力行使に移ってしまっていた。今考えてもあの時の彼女の行動には疑問を感じてしまうのだが、今の考えるべきはそこではない。

「現状の展開は人型の行動によるって感じね。昨日のことから考えてノイズ以外には好戦的でないような気もするけど、アレのまともな判断に願うしかないか。逃げられちゃったら困っちゃうけど」

結局、考えても今やれることが増えたり変わったりすることはな

かった。今後の展開が好転するには第三者の介入がなくては期待出来ないのが現状である。

少しの間考えている内に、気づけば周りの皆は自分の出した指示に従って各々作業を再開していた。指示を出した自分が何もやらないのは良くないと彼女もキーボードへ手を伸ばすが、その前に。

「んーと」

喉が乾いた。

キーボードの側に置いておいたマグカップに手を伸ばす。確かコーヒーを入れてそのままにしていた筈。既に冷めているだろうが、喉を潤わせられるのならどうでも良かった。手に取って口元まで運んで飲むとした時、

「あら、空っぽだったか」

どうやら飲みきっていたらしい。切迫した状況下で、なんとも間の抜けた声を彼女は漏らすのだった。



夜の工業地帯の一角。ある程度破壊されているそこ一帯は、火災は起きていないものの小規模の煙が立ち込めていた。

その中で謎の人型、魔進チェイサーと葵い髪の少女、風鳴翼が対立していた。空から飛来した翼は地面からそびえる巨大大剣の上から彼を見下ろし、対してチェイサーは立ち込める煙の中で彼女を見上げていた。

翼が大剣の上から降りる。十メートルは確実にあるであろう高さから、まるで段差から降りるような感じで降りてみせた。スタツ、と高い所から降りたとは思えない軽やかな着地をして、姿勢を構える。

「……………昨日の様には行きません」

向けられた切先がチエイサーを捉える。この後に流れる結末は考えるまでもなかった。

「覚悟——」

「待つてくださいっ！」

そこへ、予想しなかった人物が翼とチエイサーの間に割って入る。ノイズと遭遇して、子供と逃げていたあの少女だ。しかし彼女の服装はあんなものだったろうか。今の彼女の身なりは、形状が異なっているも特徴が翼の衣装と似た物に見えた。

チエイサーに背を向け、少女は翼と対峙する。すると、両手を横に伸して後ろのチエイサーを庇う姿勢を取り始めた。

「翼さん、この人は私たちを助けてくれました！ だから悪い人じゃないんです！」

後ろのチエイサーを庇って翼に訴えかける少女。目の前で襲われかけているのを見せられた彼女は自分を助けてくれた人がどうしてそうなるのか納得できなかったのだ。その言葉に嘘はない。

だが、感情を限りなく殺した目の前の女にその言葉は届かなかった。

「……………どきなさい。貴方が何者なのかは知らないけど、その人型と仲間なら——」

「顔も名前もなんにも知りません。だけど、この人は私を、私と一緒に逃げてた子供を助けてくれたんです。たくさんのノイズと戦ってくれてたんです！ なのにどうしてこうなっちゃうんですか！」

今まで鉄の仮面をかぶっていた翼の顔がついに歪む。不愉快、邪魔。そんな感情が彼女から滲み出てきていた。

「あなたの私情は聞いてません。これはこちらの問題。部外者は——いえ、そう言えばそうですね……」

「……え？」

否定を口ずさんできた翼だが、ひと思い出したかの様に口調を変えた。彼女の冷たい目線が少女を捉える。先程までであった歪みが無くなって、また鉄のような冷たいものに変わっていた。

しかし、その口もとだけは笑っているように少女には見えた。ゾクり……、と背筋に悪寒が通り過ぎる。

「翼さん……？」

「人型もそうですが、カングニール。それを何故貴方が所持しているのかも知る必要がありましたね。なら、」

チエイサーへ向けられていた剣の切先が、ゆつくりと少女へ向いた。

そして

「貴方と私が闘うのも必然です」

瞬間、翼の足元で小規模の爆発音が鳴ってコンクリートの破片や粉塵が舞い上がる。

それに少女が気づいた時、彼女の目の前には剣を掲げた翼の姿があった。襲い来る殺意。だが、恐怖が芽生えてくれることはなかった。あまりにも早すぎたそれに気づくことが出来なかったのだ。

そして、何の躊躇いもなく翼は剣を振り下ろした。

上から来るそれを見ているだけの少女。完全に判断が追いついていなかった。少女に向けられた剣が悲劇をもたらそうと迫り来る。しかし、刃が届くより先に少女の体が不自然に外側へと逸れた。

「ウエっ!?!」

突然訪れた感覚で変な声上がる。肩を何者かに掴まれた。冷たく冷やされた鉄の様な冷たさが肩から伝わってくる。先ほどとはまた違う感覚が彼女を襲い、背筋が凍りつく。しかし、肩に痛みはなかった。突然襲ってきた感覚で我に帰った少女は後ろを見る。そこにいたのは、助けてくれた人型の姿だった。

それに彼女が気づいた時、さつきとは違う別の感覚が彼女に訪れた。

「え……う？」

変な方向に重力がかかって、足が地面から離れる。身体が宙に浮く感覚を覚えて、やっと自分が投げ飛ばされたと知った。

引つ張られるように後ろへ飛ばされていく少女。人型の隣を過ぎ、後ろの方で軽くバウンドしながら尻餅をついた。短い悲鳴をあげるが、同時に起きた轟音で掻き消されてしまった。



チエイスに人間の心情を理解することは出来ない。それは玩具に愛情を注ぐことにとでも良く似ている。どんなに愛情を捧げても玩具がそれに答えてくれることは決してない。物には、感情も命も無いのだから。

「待ってくださいー!」

チエイサーと蒼い髪の少女の間に少女が割って入ってきた。今の状況が分からない程、少女は幼くない筈だ。危険を承知の上でその行動をとっているのか。それこそありえない。ただでさえノイズに追われて体力の無い少女が危険を冒して何を得られるというのか。

果たしてそれは何のために。何が目の前の少女を動かしているのか。その行動原理をチエイサーは全く分からなかった。

理解、不能だ。

「——この人は私を助けてくれました！ だから悪い人じゃないんです！」

それでも少女の行動原理を模索する。動機が必ずある筈だ。

何故危険に手を出すのか。理解不能。

得られる利益は何か。理解不能。

自分を庇う理解は何なのか。理解不能。

本能？ 有り得ない。

理由、理解不能。

行動原理、模索不能。

理解不能、理解不能、理解不能——

「……どきなさい。貴方が何者なのかは知れないけど、その人型と仲間なら——」

この状況で得られる少女の利益を模索する。

理解不能、理解不能、理解不能——

「顔も名前もなんにも知りません。だけど、この人は私を、私と一緒に逃げてた子供を助けてくれたんです——」

理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。

理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。

理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。
理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。
理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。
理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。理解不能。

「——なのにとーしてこうなっちゃうんですか！」

ERROR——…

「あなたの私情は聞いてません。これはこちらの問題。部外者は——
いえ、そう言えばそうですね……」

人間は——

「……翼さん？」

愚かで——

「人型もそうですが、カングニール。それを何故貴方が所持している
のかも知る必要がありましたね」

醜く——

「貴方と私が闘うのも必然です」

愛しい——

『そうは思いませんか?』

突然、暗闇で響き渡る轟音。煙が立ち込んで、中から蒼い髪の少女が弾き出される。まるで車に弾かれたように吹き飛んで、後ろにあった壁に背中を打ち付けた。

「あ……ぐあ——ッ!？」

背中がコンクリートの壁にめり込む。目や口が大きく開かれて、少量の吐血をする。呼吸器官が麻痺して、苦しみと痛みが腹の中で混じり合う。壁がミシミシと悲鳴を上げながら亀裂とクレーターを生み出して、そこでやつと勢いが死んだ。力無く、少女は仰向けに倒れ込む。

「あ……う、あ………」

辛うじて意識はあったが、支脚が痺れまともな呼吸も取れずにいた。這いつくばる格好のまま顔を上げる。目の前にあった光景には、暗闇で迸る紫電の閃光と——

「敵対対象を排除する」

死神が立っていた。

誤り

異なる物体同士が衝突して、金属音ともまた違った甲高い音がとある夜の工業地帯で鳴り響く。続けて人の身の丈を軽く越す大きな煙りが上る。しかし、それ程までの規模を起こせる可燃物も無ければ砂塵や埃もそこには無かった。それも広い工業地帯のわずかな一角でそれは起こった。間違いなく異常な後継であったが、それを目撃した人間は誰一人としていなかった。勿論、当事者を除いてだが。

立ちこめる煙りの中から人影が投げ出される。その正体は、背中まで届く蒼い髪の少女。少女はまるで車に撥ねられたかの様に飛ばされていき、離れた先の壁へ衝突し、そこで少女は力無くその場に倒れ込んだ。

そして、同じ煙りの中で人影がもう一つ。しかし影の形こそ人のものであったが、煙りの中に隠れたその正体は人間ではないだろう。言い変えるなら人型に近い何か。それを証明するように煙りの壁は薄れていく。

影が動き、ガシャリ、ガシャリと鉄かなにかが砂利と擦れたる音が同じ步調でなる。しかし不意に吹いた風で煙りが掻き乱れると直ぐにその音は止まった。

乱れた煙りがしだいに薄れていき、隠れていたその正体が現れる。オレンジ色に光る大きな複眼。車か何かのスクラップを無造作に貼り付けたような装飾の左右非対称の体。頭部の形は何かのエンジンのように見える。薄暗く見えにくい色合いは紫と銀。無骨な姿だが、誰が見てもその姿からは攻撃的な意図が受け取れるだろう。その姿からロボットという言葉がそれには似合う。

その正体は魔進チエイサー。しかし、その名を知る人間は誰一人いない。

『敵対行為を確認——』

チエイサーはそっと右手に纏った武器を構えた。蜘蛛の形を模し

た近接武装、フアングスパイデイ。そしてそれに連結され一体となっているもう一つの武器、ブレイクガンナーの銃口を空の手で押した。

「execution・Full break——spider」

フアングスパイデイの先端にエネルギーが紫電を散らしながら充填されていく。そして得物を向けた先にいるのは今も力無く倒れている少女の姿。

チエイサーはブレイクガンナーのトリガーに指をかけ、

『敵対対象を排除する』

一つの迷いなく、トリガーを引いた。トリガーが引かれると放電を散らしていた紫電が得物の刃先で一度球体状に収縮し、小規模の炸裂。そして一直線のレーザーとなって放たれた。

獲物を貫く筈のレーザーだったが、予期せぬ介入が彼の元へ駆けつけた。

「やめてくださいっ!!」

放ったと同時に後ろからの声で反応が遅れてしまう。

小柄な少女が声を荒らげてチエイサーの腕にしがみついた。今まで後ろにいた正体も名も知らない少女だ。そして彼女は全身を使つてしがみついた腕を大きく揺すぶった。

『何をするッ!』

狙いを失ったレーザーはグンツと角度が下がり雑に地面へ激突。そこで止まることはなく、そのままガリガリと地面を削りながら建物と衝突。そこで大きな爆発を起こした。爆風と煙幕が立ちこんで、蒼い髪の少女はそれの中に隠れてしまう。巻き起こった爆風は凄まじ

いもので、その勢いは辺りに散った破片を運びチエイサーと少女の元まで及んだ。

「っ、翼さ——」

『離せッ！』

チエイサーが腕を力任せに振るってしがみついていた少女を振り払った。強引に引き剥がされた少女の足はもつれ、バランスを崩しその場に尻餅をついた。

「いっつ……」

反射的に目を瞑り短い悲鳴をあげる。そして次に目を開けたとき、チエイサーの持つ武器が目の前に突きつけられていた。

「っ!？」

フアングスパイデイの2本の切っ先が目の視点と重なった。悪寒が走りだして視線はそれにクギ付けになる。

『何故邪魔をした……?』

チエイサーは少女を見下ろし言葉を放つ。その言葉の圧力は、誰が相手であっても恐怖感を植えつけられる筈のものだったであろう。しかし、彼の視線にいる少女は少し違っていた。

「だっ……て……」

『……む?』

「だって……！」

拳をグツと握りしめて少女が立ち上がる。一步前に踏み出す。向けられた武器を避けて、よりチエイサーに近づいた。握った拳を胸元に押し込んで、大きく息を吸った。

「人を傷つけちゃダメなんです！ その人だけじゃなくて自分も傷つくし、痛いし辛いから、嫌だし辛いから……痛い、から……だから……だから——」

まるで散らばった物を手当り次第に拾って投げつけているようだった。言葉は繋がっておらずバラバラでしつかり話せていない。それでも少女はやめようとしなかった。大きく息を吸ってグツと力を込めて、更に言葉が続けた。

「だから、守らなきゃいけないんですッ!!」

これまで並べた単語はどれもバラバラだったから、これも意図して口にした言葉ではなかったのかもしれない。しかし、そうであったとしてもだ。少女が伝えたかった思いがその一つだったのなら、この言葉が出たのはきつと偶然ではない。

『マ、モ、ル……』

——何ヲ？

『誰ヲ……』

——誰を？

『ニンゲンヲ……』

脳裏に電流が走った。引っ搔くような、ノイズのような音。

——違う

『ソウダ……』

——違う

次第に音は大きくなって、周りの音は掻き消された。

『俺は……俺の使命は』

——チガウ

『ニンゲン、を……』

——チ、ガ

『……人間を守る、こと』

——

ノイズが止まった。

掻き消された音が再び流れ始め、チエイサーの目の前には少女が対峙していた。そして自身の腕が少女へ向いていることに気づいた。

『俺は……！』

人間に刃を向けていた。

『俺はなんて、ことを……!』

すぐさまブレイクガンナーからバイラルコアを引き抜いて武装を解除。装備されていたファングスパイディは逆再生されるように形を変えながら背中へ収納される。

『済まなかった』

今度は空いた手を少女へ差し出す。何のことは無い。この状況でどんな言葉を出せば良いか分からず、それで手を差し出してしまったのだ。

「あ………」

だが、チエイサーが手を差し出すと少女は後ろに下がってしまった。差し伸ばす手が止まる。

『……当然の結果か』

「え、あ……えつと——」

弁解する言葉が無い。目の前にあるもの。これが全てだ。過ぎ去ってしまったことに彼はどうすることも出来なかった。守るべき対象へ自ら刃を向けてしまった。決してあつてはならない事実が重くのしかかる。しかし、そんな彼のことを無視するかのように状況は変化していく。

突然、辺りが騒がしくなった。

『……時間のようだ』

多くの車両がこちらへ向かってくる音を聞き取る。もうこれ以上

はいられない。そう判断したチェイサーはバットバイラルコアを手
に取った。

そして、少女と向き合う。

『済まなかった』

バットバイラルコアをブレイクガンナーへ差し込む。

「Tune・chaser——bat」

背中からコウモリの羽を模した金属の翼が生やされる。その一瞬
だけ、チェイサーの瞳が一層強く光った。

『だが、俺を許す必要は無い』

「え、えつと……あの」

少女に困惑の表情が浮かび上がる。この状況ではそうもなるだろ
う。守る筈がその逆、かえって危険な目に遭わせてしまった。どうし
て自分とは考えるほど、その謎は深まっていく。

『俺には何も出来なかった。だが、あとは人間が救助をしてくれる。
俺は必要ない』

故にこう考えた。人間なら、どうしたのかと。

『……理解、不能だ』

多くの塵を巻き上げて、チェイサーは空の暗闇に消えた。